

六ツ美を切り拓いた人々 についての補足説明

引用文献・六ツ美風土記、私達のふるさと中之郷、ふるさと六ツ美西部、六ツ美村誌
六ツ美南部の歴史・文化を紐解く わたしたちのふるさと六南114選 他

掲示資料以外 で活躍した人々

六ツ美の人々の暮らしは矢作川との闘いでも
ありました。広大な耕地を安定して利用する
ための堤防構築や用水開発、耕地整理や河川
改修など、よりよい生活のために尽力した人々
がいます。また、大嘗祭悠紀齋田に関わった人も
多くいます。こうした六ツ美を切り拓いた人々
の存在も忘れてはなりません。

六ツ美を
切り拓いた
人々

悠紀の里 サポーター会

掲示資料以外で

中世から江戸時代

にかけて

活躍した人々

(天久保氏 本多氏等)

を追加記載

掲示されている 六ツ美地区を拓いた人々

- 人物は、明治・大正時代に活躍した人が主
- 活躍した内容
 用水開発・農地整理 悠紀齋田 軽便鉄道
 六ツ美村の行政・教育
- 主な人物名
 早川龍介 鍋田恒雄 鶴田勝蔵 早川治三郎 杉浦定吉
 早川定之助 山崎延吉 野々山卯三郎 杉浦藤助
 長嶋藤八・長嶋藤八郎（江戸時代末期～）
 野本新十郎・渡辺弥蔵（江戸時代初期）
- 上記以外の人物は一覧表に記入
- 参考 歴代六ツ美村の村長(第1代～9代)

早川龍介 (1853-1933)

衆議院議員 中島耕地整理 悠紀齋田

- 代官の家に生まれ、明治の世になると27歳で県会議員となり、県議会副議長を務めた
- 明治23年(1890)に**第1回帝国議会**の選挙で**衆議院議員**に選ばれ、大正9年(1920)まで、**10回**の当選をした
- 総理大臣を務めた伊藤博文、山縣有朋、農商務大臣を務めた金子賢太郎、曾根荒助などと精通していたと言われる
- 明治33年に耕地整理法が発布され、耕地整理の奨励に取り組み、翌年 **中島の「耕地整理」**につなげた。
- 明治41年から44年に**「高橋用水の大改修」**を主導し、灌漑面積が広がった。
- 「耕地整理」、「高橋用水の改修」は、「悠紀齋田」選定の要件の中で重要な項目を満たすことに寄与した
- 大正4年(1915)の悠紀齋田諸儀式・稲田の管理等において、衆議院議員でありながら、**村人の希望で六ツ美村村長を兼務**した。
- 昭和8年9月に六ツ美村の自邸で逝去した。享年81歳 村葬神式にて葬られた。
- 多趣味で、漢詩、和歌、俳句、絵画、尺八、三味線、唄、踊りなど巧みであった。

鍋田恒雄(1848-1931)

耕地整理・西尾軽便鉄道の推進

- 明治19年(1886)から36年まで長期に渡り
県会議員を務めた
- 明治39年(1906) **六ツ美村の初代村長**に
- **耕地整理の推進**・・・下中島耕地整理組合
を設立し、事業許可申請
明治34年に起工、37年に竣工
委員長 早川龍介 副委員 鍋田恒雄、
鶴田勝蔵 事務長 早川治三郎
- **高橋用水の整備**にも尽力した
- 明治43年(1910) **西尾軌道株式会社**が
設立されると、六ツ美から鶴田勝蔵と共に
参加し出資した。
その結果、翌年、西尾駅と岡崎新駅との
間、13.3kmの鉄道が開通した。
(**西尾軽便鉄道**)

鶴田勝蔵(1843-1910)

耕地整理・西尾軽便鉄道の推進

- 文久元年(1860)に庄屋となり、以後村政に
40余年、生産の向上等に尽くした
- 従事する藍作と養蚕の発達を図り、貧困者
などを救うために金品を援助した
- 鍋田恒雄等と共に耕地整理を推進
- 悪水整備事業に奔走し
「二毛作のできる水田」に整備した
これにより、米と麦、米と菜種が収穫できる
ようになった
- **西尾軽便鉄道**の設立にも貢献
軽便鉄道の開通前、明治43年7月に没した。
(享年68才)

早川治三郎(1864-1924)

耕地整理・悠紀斎田

- 耕地整理推進時の事務長

委員長早川龍介の元で、18年間献身的に働く

[中島八幡社に顕彰碑があり]

- 悠紀斎田の諸儀式の内容等をまとめた「中島案内」の編集に参画

杉浦定吉(1854-1910)

安藤川の改修

- 明治時代、安藤地区は沼や水はけの悪い土地であった
- 安藤川の第2期改修に活躍 明治33年(1900)3月着工-明治34年(1901)3月竣工
工事は、水路を改修し、その川幅を広げ、排水を大幅に改善した

水路の長さ 本線約7km

赤渋支線約4.2km 宮地支線約4.5km 等

不毛の地が、良田となり、村は潤った

[第1期改修は、明治15年の矢作川の三島切れの後の改修]

早川定之助 (1866-1935)

悠紀齋田所有者 齋田管理

- 悠紀齋田の田の提供者
- 納穀示達式に村長早川龍介他関係者数名と共に出席
- 齋田に入るときは、**身を清め**、礼服又は作業着に着替えて、齋田通用門でお祓いを受けて作業をしたが、早川定之助は、特に**晒(さらし)の浄衣(じょうえ)**・・神官が神事の時着る白い清潔な衣服・・を着て、**烏帽子(えぼし)を被り**、見回り・管理を行った
- 翌年、愛知県庁において、天皇家からの「紋付(菊の紋付)の銀杯一組」、「御下賜金(ごかしきん)」が伝達された
- 下中島村村長、助役、収入役、郡会議員を歴任
- 村農会役員、県農会農事奨励員を歴任

山崎延吉 (1873-1954)

悠紀齋田 農業技術指導

- 悠紀齋田管理・運営時の**農業技術指導**の**最高責任者**(技師農事試験場長)
- 悠紀齋田御田植歌の歌詞の創作(三人の一人)
- 教育者として日本全国を講演した。1908年から1934年までには6000回以上の講演
農業の多角化を日本全国に広めた
- 日本の農政家・教育者、衆議院議員(1期)
- 貴族院勅選議員。
- 愛知県立安城農林学校初代校長

野々山卯三郎(1866-1929)

占部村から六ッ美村誕生への橋渡し
悠紀齋田奉賛会・接待部長

- 慶応2年(1866)正名に生れる
- 占部村において、土地地区整理委員、収入役、助役等をつとめて、32歳の若さで、**占部村村長**となる
- 六ッ美村誕生まで、村長を務め、碧海郡内で種々の要職を歴任すると共に、「**六ッ美村誕生の橋渡し**」的役割を果たした
- **耕地整理、安藤川の改修**等にも貢献
- 悠紀齋田奉賛会(会長県知事)において、接待部長を任命されている
庶務部長は早川龍介村長
- 大正6年六ッ美村農会長
- 大正7年安藤川悪水組合会議長
- 昭和4年享年64歳で没す。

杉浦藤助(1851-1925)

杉浦製糸の創始者
悠紀齋田奉賛会・接待部委員

- 嘉永4年(1851)生まれる
- **明治31年に杉浦製糸所を創る**
- 明治の終わりは、従業員の数は200人を超え、昭和時代には500名ほどになり、県下で1,2を競う程の大工場となる
- 中島の町も活気を帯び商店、旅館、料理店等が多くできた
- **中島の耕地整理**に参画
- 村会議員
- 悠紀齋田奉賛会の接待部委員
- 大正14年(1925)享年75歳で没す
(崇福寺に大きなお墓があり)

長嶋藤八(1806-1886)

(中之郷の江戸時代の大庄屋)
堤通り手永 お田扇祭り

長嶋藤八郎(1837-1887)

(父は長島藤八、江戸時代の大庄屋)
堤通り手永 お田扇祭り

- 岡崎藩は**六つの地域**に分けその最高責任者として**大庄屋**を設け、これを**世襲制**として、この6区画制の単位を「**手永**」と呼び、村作りをし藩の支配体制に組み込んで安全と治安のために利用した。
- 岡崎城主本多忠肅が**明和七年(1770)**に採用した。
- 六ツ美地区では**堤通り手永**・・・大庄屋 **中之郷の長嶋家**
山方手永・・・大庄屋 六名の斎藤家
- **大庄屋の役割**・・・年貢の徴集、夫役の割付、法令の 伝達、治安、救済に関する事務などの担当
- お田扇祭りの推進責任者
- 藤八郎は、俳人東川舎芹秀でもあり、「**中之郷八景**」の句を創作

野本新十郎・渡辺弥蔵

江戸時代初期に占部用水の開削

- **占部地区**は、江戸時代初期に占部用水が開削されるまでは、川らしい川がなく日照りが続くと干害となって住民は苦しめられた
⇒そこで、慶長年間になり、野本新十郎(正名)と渡辺弥蔵(中村)が水路を開削し矢作川の水を4村(国正、定国、中、正名)の田に引こうと岡崎藩に願いを出した
- 矢作川より4村まで8Kmあり、莫大な経費がかかることから、協議がつかず、又地元地主も土地を失うこと、水害がおきる事を恐れ反対した
- そのため、1598年、野本と渡辺は江戸へ行き幕府に願いを出した。又 沿岸の農民の多くは、水の逆流、減反することを不服としたので、計画変更・補償をしながら工事を5年間実施。幕府がこの**用水の使用を認めた**のは、1603年
- 莫大な工事費、補償費等のために両氏とも家財等は人手に渡り貧窮の上亡くなった
- この用水路は完成し、「**占部川**」と称された
- 近くの**永応寺**では、毎年二人の遺徳をしのぶために「**水恩忌**」が行われている
占部川神社には、用水の守護神として祀られている
(**思案橋**は、野本新十郎、渡辺弥蔵が工事中に金銭面をふくめた多大な労苦のため工事を続行するか、夜逃げしようか等と「思案した橋」とも伝えられている)

その他の六ッ美地区を切り拓いた人々 1/2

| 時代 | 部落 | 氏名 | 生年 | 享年 | 主な功績 | 職業 |
|-------|-------------|--------------|-------------|-------------|---|--------------------|
| 江戸 | 坂左右 | 榊原弥兵衛 | 1796 | 1852 | 寺小屋師匠 | 庄屋 |
| 江戸 | 中島 | 赤松三空 | 1789 | 1859 | 宗教家(生き仏) | 崇福寺住職 |
| 江戸 | 合歡木 | 清水幸三郎 | | | 算額(享保4年(1804) 桜井神社奉納) | 学者 |
| 江戸・明治 | 中島本町 | 普翁賢岡 | 1812 | 1871 | 寺小屋師匠 | 龍泉寺住職 |
| 江戸・明治 | 中島 | 森下来蔵 | 1808 | 1884 | 和歌俳諧の雪中庵門下の宗匠 | 小笠原家の家老職、文人教育家 |
| 江戸・明治 | 合歡木 | 金原新蔵 | 1824 | 1889 | 寺小屋師匠 | 庄屋 |
| 江戸・明治 | 中島 | 尾崎猪六郎 | 1819 | 1894 | 寺小屋師匠・中島村史を編集 | 八幡社神官 |
| 江戸・明治 | 中島高畑 | 堀内善次郎 | 1843 | 1892 | 長年 六ッ美の学校教育従事者(校長) | 校長 |
| 江戸・明治 | 下青野 | 山田良造 | 1830 | 1896 | 寺小屋師匠 | 醫者 |
| 江戸・明治 | 下三ツ木 | 畔柳多貴蔵 | 1824 | 1899 | 凶作により困っている村民を領主より御下米貸興の許可を得て、村民の困厄を救った。 | 庄屋 |
| 江戸・明治 | 中島本町 | 鍋田丑乃助 | 1829 | 1898 | 米穀綿商を営み公共事業と殖産を奨励 | 米穀・綿商(子 恒雄) |
| 江戸・明治 | 占部 | 平井要造 | 1840 | 1904 | 占部学校の設立と整備に力をつくした | 初代占部村長 |
| 江戸・明治 | 中之郷 | 石川滝三郎 | | | 多額の上納金、主君から苗字御免のご沙汰 | 庄屋 |
| 江戸・明治 | 定国 | 杉浦すえ | | | 親孝行の模範として岡崎藩他より褒賞される(明治4.5.11,年) | 紡績賃作 |

その他の六ッ美地区を切り拓いた人々 2/2

| 時代 | 部落 | 氏名 | 生年 | 享年 | 主な功績 | 職業 |
|-------------|------|---------|------|------|-----------------------------------|-------------------------------|
| 江戸・明治・大正 | 中之郷 | 石川市郎右衛門 | | | 孝行(父 滝三郎への)明治2年 褒賞 | 庄屋 |
| 江戸・明治・大正 | 中島 | 石川種吉 | | | 日露戦役の功 | 下中島村助役 |
| 江戸・明治・大正 | 下青野 | 牧野久蔵 | | | 孝行で安政6年領主より褒美を興られる。 | 百姓 |
| 江戸・明治・大正・昭和 | 六ッ美 | 笠木泰之助 | 1855 | | 小学校校長 | 校長 |
| 明治・大正 | 上和田 | 杉田三郎兵衛 | | | 用水事業に尽力 | |
| 明治・大正 | 福桶 | 杉浦甚吉 | | | 貧しい中で、某家の雇人となり、母を養った。 明治11年特志を受ける | 雇い人 |
| 江戸・明治 | 中島 | 太田 廊空 | 1827 | 1898 | 京都総本山円福寺63世法燈) | 僧 |
| 江戸・明治・大正 | 中島本町 | 石川嶺観 | 1828 | 1913 | 寺小屋師匠(長子 成章) | 浄光寺住職 |
| 江戸・明治・大正 | 下青野 | 碧海康純 | 1852 | 1922 | 寺小屋師匠 | 慈光寺住職 |
| 江戸・明治・大正 | 合歓木 | 清水嘉平治 | 1850 | 1918 | 小学校教員、算学の師範(太陽歴改正意見書) | 小学校教員、校長 |
| 明治・大正・昭和 | 中島上町 | 松村櫻雨・松僊 | 1877 | 1940 | 悠紀斎田の一連の営みをまとめた | 日本書家 早川龍介が帝国議会開催中の定泊していた旅館の息子 |
| 明治・大正・昭和 | 下青野 | 碧海康温 | 1883 | 1943 | 地質学の理学士、東京大学で地震学の研究 | 学者(慈光寺に生れる) |
| 江戸・明治・大正・昭和 | 占部 | 野本芳三郎 | 1861 | 1945 | 農業増進改推進者(農会長) | 占部村長 |
| 明治・大正・昭和 | 中島 | 石川成章 | 1872 | 1945 | 京都大学教授 (地質学、鉱物学) | 学者(浄光寺で生れる) |

歴代 六ツ美村の村長

六ツ美村の設置(明治39年4月)

<中井、糟海、青野、合歓木、占部、中島の各村>

| | 歴代六ツ美村長 | 出身 | 任 期 |
|-----|---------|-----|---------------------|
| 第一代 | 鍋田恒雄 | 中島 | 明治39.8~40.8 |
| 第二代 | 鈴木藤作 | 井内 | 〃 40.9~44.8 |
| 第三代 | 高木傳八 | 上青野 | 〃 44.9~大正3.12 |
| 第四代 | 河原政八 | 合歓木 | 大正4.1~4.3 |
| 第五代 | 早川龍介 | 中島 | 〃 4.4~4.11(大嘗祭悠紀齋田) |
| 第六代 | 野本芳三郎 | 正名 | 〃 4.12~8.12 |
| 第七代 | 太田虎吉 | 土井 | 〃 9.1~13.1 |
| 第八代 | 神尾由五郎 | 上青野 | 〃 13.1~14.8 |
| 第九代 | 二村久五郎 | 合歓木 | 〃 14.10~昭和2.11 |

ただたか

大久保彦左衛門忠教(1560-1639)

「江戸幕府旗本」三河物語の著者 上和田の出身

- ・徳川家臣**大久保忠俊の弟忠員**の八男 岡崎市宮地町、妙国寺前の大久保氏の族党の屋敷で誕生 兄に大久保忠世、忠佐。
- ・忠世、忠佐の旗下で各地を転戦・・・高天神の戦い、第一次上田城の戦い等で活躍
- ・天正18年(1590年)小田原征伐の後、知行3000石の大身の旗本に格上げされた
- ・1600年の関ヶ原の戦いでは、**家康本陣で「槍奉行」**を務め活躍
- ・1614年、甥大久保忠隣が大久保長安の謀反疑惑に連座する形で改易、彦左衛門も知行を失う、この事件の影には**忠隣と本多正信・正純の確執**があった
- ・1615年、「大阪夏の陣」では、許されて槍奉行として家康の近くに控える
- ・額田郡幸田郷で2000石の所領を給わる(幸田町では「彦左まつり」が毎年 実施されている)
- ・彦左衛門は典型的な三河武士の一人であったが、**武闘派の時代から吏僚派の時代**に変換する中で、忸怩たる思いも強かった・・・特に、徳川氏譜代家臣や武功の武士に対する軽視や、批判等に対して・・・このような背景の中で「三河物語」を書いている 全てが真実でないと言われているが、大久保一族の活躍、徳川家の歴史、武士のあり方を書き残した
- ・岡崎市竜泉寺町長福寺に墓所がある
- ・子孫・・・旗本子孫は明治維新で各地へ散り、現在、竜泉寺町と幸田町に在住

大久保忠俊(1499-1581)

蟹江7本槍 一向一揆 上和田屋敷

- 明応8年(1499)生まれる。
- 宇津忠茂の長男で、**忠俊の代で大久保に改姓**し、以後一族は全て大久保姓となる 三河松平氏の家臣
- 松平清康, 広忠, 徳川家康の3代にわたってつかえ, 天文6年清康の叔父の松平信定に占領されていた岡崎城の奪回にはたらく。
- **三河の一向一揆**では, 大久保一族は上和田砦を拠点とし、家康の最大の力となって、一人の離反者も出さず一揆軍と戦った。
- 鎮圧後一揆方の**門徒武士、寺院等の罪を許すように働き**、上和田の浄珠院で、家康と一揆軍との**和睦の仲介**をした
- 天正(てんしょう)9年9月死去。83歳
- 通称は新八郎 号は**常源**

大久保忠世(1532-1594)

一向一揆 徳川十六将 上和田屋敷

- 勇将大久保忠員(**忠俊の弟**)の長男として、天文元年(1532)生まれる。
- 岡崎、浜松時代、**家康付の旗本**の一人として、旗本先手役を勤めた。
- なかでも永禄6年(1563)の一向一揆には、一族を集結して家康を助けた
- 元龜3年(1572)の**三方ヶ原敗戦**の際、犀ヶ淵に武田軍を夜襲して敵の心胆を奪い、武田信玄も賞賛したと伝わる
- 天正3年(1575)の**長篠の戦い**において、忠佐等と大活躍し、織田信長からも賞賛を受けた
- 家康の関東移封により小田原藩4万石を領したが、文禄3年(1594)9月、63歳で没した。
- 子は大久保忠隣、二代将軍秀忠の重臣となり、小田原藩7万7千石へ
- 後に、家康に取り込んでいた本多正信との政争に敗れ失脚

大久保忠佐 (1537~1613)

一向一揆 徳川十六将

- 久保忠員の2男として、天文6年上和田屋敷に生まれる
- 一向一揆で上和田屋敷を陣屋として奮戦した
- その戦功は数を知らず、特に天正3年(1575)の長篠の合戦での、めざましい戦いぶりが織田信長の目にとまり、「**長篠の髯**」とほめそやされた。
- その豪勇ぶりは、「白刃矢石の間を馳走して、着するところの武具しばしば 斬破らるるといえども、遂に創を被ず(怪我をしなかった)」と称された
- 関ヶ原の合戦後駿河沼津2万石を領した。
- 慶長18年(1613)9月、77歳で没した。
- しかし、その子忠兼に跡継ぎがなく、絶家となる。

本多正信 (1538-1616)

三河一向一揆・一揆方 家康の側近

- 天文七年の生まれで、家康より四歳の年長
- 幼少より家康に仕えたが、三河一向一揆の時、門徒である正信は**一揆方**に加わった。
- 一揆敗北後、加賀国などを流浪した。おそらく一向宗門徒の知己を頼ったのであろう。
- のちに家康のもとに帰参し、姉川の合戦に参陣、表舞台に立ったのは、1598年の秀吉の死後
- 1603年に江戸幕府を開設すると、**家康の側近参謀として幕府を実際に主導**
- 武勇一辺倒の**武闘派**と正信等の**吏僚派に分かれて権力闘争**が生じたが、家康の信頼は、絶大で「乱には軍謀にあづかり、治には国政を司り、君臣の間相遇のこと、水魚のごとし」と評したと伝わる関東入国後、一万石を与えられ後二万二千石
- 駿府での家康の側近「**本多正純**」は嫡子

本多作左衛門重次(1529-1596)

「鬼作左」 三河三奉行 岡崎城代 三河武士の手本

- 岡崎市 宮地町、犬頭神社の神官屋敷で生誕、家は大平町。子孫は明治維新で祖先の生地へ帰り宮地町に在住
- 三河一向一揆の際は、門徒側に付くが、改宗して家康方に付いて活躍
- 三河平定後、「三河三奉行」の一人に任じられ、民生をつかさどる。勇猛果敢、剛毅にして、実直であったので、その勤めぶりを人々は「鬼作左」と評した
- 1572年の「三方ヶ原の戦い」では、武田軍に攻められ総崩れの時、家康にふりかかる敵を倒しながら城に付き、家康の命を救った。 高天神の戦い、長篠の戦い、蟹江城の攻略でも活躍
- 1575年の長篠の戦の時、留守を預かる妻に宛てた「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな馬肥やせ」という手紙は簡潔、明瞭な手紙として有名
- 一軍の将として武功を重ねると共に、兵糧の備蓄、新領駿河の国の政務、家康出陣中の守城役等に能力を発揮。 岡崎城代の石川数正が突如として出奔し豊臣秀吉の家臣になった後、1586年から5年間城代を務めた。 家康が秀吉の要請に応じて上洛の際、人質として秀吉の母「大政所」が岡崎に来た時、冷遇したという事で秀吉の咎を受けた
- その後も、種々の場面で秀吉に対して反抗的?言動を行い、秀吉が激怒した
- 家康の関東移封後、秀吉の切腹させよの命令が実行されず、旗本は江戸常駐が定めだが、上総の古井に移し旗本上位の三千石を与えて隠居させ、後、下総の取手(茨城)に移された。
- 家康は、作左衛門冷遇の代償として、嫡子「成重」を福井の丸岡城主に取り立て、四万三千石を与えた

本多成重(1571-1647) 「お仙なかすな」のお仙 丸岡藩

- 元龜2年(1571)本多作左衛門重次の嫡男として浜松に生まれる。
幼名 仙千代、成人して丹下という。
- 家康の小姓となり、小牧の役後の天正12年(1582)家康の子於義丸(結城秀康)が、秀吉の人質(養子)として京都へ送られた時に随従、それ以後秀康付き人
- 慶長18年(1613)秀康が越前に移った時、付家老として丸岡藩四万三千石余を与えられ、正保4年(1647)まで藩主を務めた。
- 大坂二度の陣には秀康の子忠直に従って出陣し活躍した。
- 正保4年(1647)6月76歳で没した。
- 現在、丸岡町が「日本一短い手紙」を募集し、テレビや書籍で紹介されているのはこの故事に発している

渡辺守綱(1542-1620) 槍の半蔵守綱 徳川十六将

- 一向一揆の際、門徒武士として戦い戦死した
渡辺高綱は父
(勝鬘寺には、高綱の立派な碑がある)
- 守綱は渡辺家23代目として、天文11年(1542)占部(浦部)に生まれる。
- 一向一揆では家康と争うこととなったが、終結後は再び家康の家臣となり、足軽100人の大将として活躍した豪勇の士で、永禄5年(1562)9月の赤坂の戦いには、味方に利なく敗戦は必至であったが、守綱1人取って返し戦うこと10度、功名の槍 3度あげ、遂に味方を勝利に導いて「槍の半蔵守綱」と呼ばれた。
- 慶長15年、寺部(現豊田市)に陣屋をおき1万5千石を領した。
- 元和6年4月、79歳で没した

本多広孝(1528-1598)

家康天下の立役者の一人
家康家来の最初の城持ち

- 先祖は松平長親に仕えた松平秀清であり、以後 清重、信重、広孝と続く。
- 大永8年土井郷において領主本多信重の嫡子として生まれる。
- 徳川家康の父松平広忠につかえた後、家康にしたがった。
- 三河一向一揆の争乱では嫡子の康重を家康に差し出し、自らは土呂・針崎の一向宗と抗戦し、また吉良義昭の東条城をも攻めた
- 一揆平定後、今川氏の三河「田原城」をおとしてこれをあたえられた。
- 長篠(ながしの)の戦い、豊臣秀吉の九州平定、小田原城攻めなどに参加。
- のち上野(こうずけ)(群馬県)の白井城主。
- 慶長2年12月70歳で没した。
(土井町蔵屋敷には本多秀清の廟所がある)

本多康重(1554-1611)

家康天下の立役者の一人
岡崎藩5万石の最初の城主

- 天文23年土井郷において領主本多広孝の嫡子として生まれる。
- 永禄12年(1569)、掛川城攻めにて初陣を果たした。
- 元亀元年(1570)の姉川の戦いや天正3年(1575)5月の長篠の戦いに参加し、特に長篠の戦いにおける鳶巣山の戦いで武田軍に左股を撃たれながらも活躍し、その時の弾は生涯にわたり抜けなかったとまで伝わっている。
- 小田原征伐後に家康が関東に移されると、田原城より上野白井藩に移され2万石を与えられた。
- 関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601年)には三河岡崎藩に5万石を与えられた。
- 慶長16年(1611年)3月58歳で死去

土井利勝(1573-1644)

江戸幕府最初の大老 家康、秀忠、家光に仕える 幕府の最高権力者

- 天正元年(1573年)、遠江国浜松に生れた説と、岡崎市土井町に生まれた説がある。幼少時は**岡崎市土井町**で過ごす。
- 実父 水野信元(家康の伯父) 養父 土井利昌 (但し 家康の落胤の説等もあり)
- 数え年3歳の時、初めて主君家康に対面を許され、家康より土井松次郎を名乗るよう直々に命じられる。
- 天正7年(1579)に秀忠が生まれると7歳にして子守役となる。
- 1605年、秀忠が上洛して征夷大將軍に任ぜられた時、隨行して大炊頭に任官、以後秀忠の側近としての地位を固めた。大阪の陣(1615年)の後、諸大名を幕藩体制に組み込む**江戸幕府の体制の礎**を築くことに貢献した。
- 1623年家光が將軍の世継ぎになった時、補佐となり、1623年將軍職に就くと**大老**に取り立てられた。家光を助け、幕政に辣腕を奮った。
- 下総の国**古川16万石**の城主になった。
- 1635年、武家諸法度に參勤交代制を組み込む等の大改訂を行い、**幕府の支配体制を確定**させた
- 寛永21年(1644)享年71歳に死去
- 岡崎市中之郷町**浄妙寺**にある大楠は名木として岡崎市に指定されたが、これは利勝の母(玉堂院)が墓木として1605年に植えたもので樹齡400年、俗に「**土井楠**」といわれている。

石川数正 (1533-1593)

三河一向一揆後の岡崎城家老から秀吉の家臣への転身

- 天文2年(1533年)、石川康正の子として三河で生まれる。
- 家康が今川義元の人質時代から近侍として仕え、桶狭間の戦いで今川義元が討たれて家康が独立すると、数正は今川氏の人質であった家康の嫡男信康と駿府に留め置かれていた家康の正室築山殿を取り戻した。
- **三河一向一揆**が起こると、父・康正は家康を裏切ったが、数正は**浄土宗**に改宗して家康に尽くした。このため戦後、家康から**家老**に任じられた。
- 天正10年(1582)に織田信長が死去し、その後に信長の重臣であった羽柴秀吉(**豊臣秀吉**)が台頭すると、数正は家康の命令で秀吉との交渉を担当した。天正12年(1584)の**小牧・長久手の戦い**にも参加。この戦いにおいて家康に秀吉との和睦を提言した。
- 天正13年(1585)11月13日、突如として家康のもとから**出奔し、秀吉のもとへ逃亡**した。
- その後、秀吉から河内国内で8万石を与えられ、秀吉の家臣として仕えた。数正は松本に権威と実戦に備えた雄大な**松本城**の築城と、街道につないで流通機構のルートを掌握するための城下町の建設、天守閣の造営など政治基盤の整備に尽力した。
- 文禄2年(1593年)に死去。享年61。墓所は美合**本宗寺**にある。
- 長男の康長が継いだ。遺領10万石のうち、康長は8万石、次男の康勝は1万5000石、3男の康次は5000石をそれぞれ分割相続することとなった。

板倉勝重(1545-1624)

永安寺に出家後還俗 京都所司代

- 父は「善明堤の戦い」で戦死した**板倉好重**(1561年)
(中島西町に好重の石碑があり)
- 幼少時に中島 永安寺に出家 父好重らが討死したため、還俗して家を継ぐ
- 天正14(1586)年9月、徳川家康が駿府城に移ったとき駿府の町奉行、その後、小田原の地奉行、江戸の町奉行、京都の町奉行等を務める
- 慶長8年(1603)2月、家康将軍宣下のとき、伊賀守に叙任、**京都所司代**となった。同14年加増され、都合1万6610石
- また、若手公家と宮中女官の密通事件(猪熊事件)を契機に朝廷の監察も行い、同17年からは、**公家諸法度**、**勅許紫衣・諸寺入院法度**の制定に参与、京都における徳川勢力の伸張の立役者となった 80才で死去

板倉重矩(1617-1673)

中島藩主 老中 京都所司代

- 板倉勝重は祖父、父は板倉重昌
- 島原の乱に際しては、上使となった父について島原に出陣した。1638年父が戦死し、その際の不手際を問われて同年12月まで謹慎処分
- その後、許されて深溝藩へ
- 1639年 中島へ移転。**中島藩主**へ
- 寛文5年(1665年)に**老中**となり、4代将軍徳川家綱を補佐した
- 寛文8年(1668年)**京都所司代**に
- 寛文10年(1670年)、再び**老中職**につく
- 中島藩在任中、重矩は1万石から4万石最終的に5万石になった
- 1672年中島藩は廃藩
- 寛文12年(1672年)に下野烏山へ移封された。57歳で死去

前記した武将と徳川家康との関連は非常に深いので 家康公の関連年表 (三河武士のやかたのホームページより)

| 年号(西暦) | 内容 |
|-------------|---|
| 天文11年(1542) | 12月26日午前4時ごろ 家康(幼名、竹千代)岡崎城に生まれる。 |
| 天文16年(1547) | 竹千代(家康)、人質として駿府に赴く途次、田原戸田氏に奪われ、尾張織田氏のもとに送られる。 |
| 天文18年(1549) | 家康の父、松平広忠没。 今川勢、織田方の安城城を陥落させ、城將織田信広を生け捕りに、竹千代との人質交換に成功。竹千代は駿府に送られる。 |
| 弘治元年(1555) | 竹千代、元服して次郎三郎元信となる。 |
| 弘治3年(1557) | 元信、関口義広女(築山殿)と結婚。(前年説あり) |
| 永禄元年(1558) | 元信、前年よりこの年のあいだに元康と改名する。 元康、今川義元の命で寺部城の鈴木重辰を攻める(家康の初陣である)。 |
| 永禄3年(1560) | 義元、元康に大高城兵糧入れを命じる。 今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれ戦死したため、岡崎城にもどり、三河平定に着手する。 |
| 永禄4年(1561) | 元康、今川方の中島城主板倉重定のほか、西尾城(西条城)の牧野氏、東条城の吉良義昭を攻める。 西尾城攻略に手柄のあった酒井政家に同城が与えられる。 元康、父広忠茶毘の地能見に松応寺を建立。 |
| 永禄5年(1562) | 元康、清洲城で織田信長と会見、三尾同盟を結ぶ。 元康、西郡上ノ郷城の鵜殿長照を攻める。 元康、清康・於久菩提のために随念寺建立。 |

| | |
|-------------|---|
| 永禄6年(1563) | 元康、家康と改名。 三河一向一揆がおこる。 |
| 永禄7年(1564) | 家康、一向一揆を鎮圧し、東三河平定の戦いを再開する。 |
| 永禄8年(1565) | 家康、今川家臣の守る吉田城、ついで田原城を開城する。 |
| 永禄9年(1566) | 家康、松平から徳川へ改姓し、従五位下、三河守の叙位・任官を受ける。 |
| 永禄11年(1568) | 家康、遠江へ進出を開始する。 |
| 永禄12年(1569) | 掛川城開城、今川氏滅ぶ。 |
| 元亀元年(1570) | 家康、居城を浜松に移し、岡崎城を信康に譲る。 家康、武田信玄と断交し、上杉謙信と同盟を結ぶ。 |
| 元亀2年(1571) | 武田勢、三河に侵入し、足助城などを陥落させる。 |
| 元亀3年(1572) | 岡崎町奉行大岡弥四郎、武田氏への通謀が発覚し、処刑される。 家康、武田信玄と三方原の戦い、大敗する。 |
| 天正元年(1573) | 武田信玄没。 |
| 天正3年(1575) | 織田・徳川連合軍、武田勝頼を設楽原に破る(長篠の戦い)。 |
| 天正7年(1579) | 家康、正室の築山殿を殺害し、信康を切腹させる。 |
| 天正9年(1581) | 家康、武田方の遠江高天神城を攻め落とす。 |
| 天正10年(1582) | 家康、織田信長とともに甲斐に攻め入り、武田氏を滅ぼす。 本能寺の変で信長死去。 家康、堺より急遽岡崎に帰る(伊賀越えの危機)。 家康、甲斐・信濃経略に乗り出す。 |

| 年号(西暦) | 内容 |
|-------------|--|
| 天正11年(1583) | 家康、本能寺門徒・道場の再興を許可する旨を妙春尼に伝える。 |
| 天正12年(1584) | 家康、尾張小牧山に陣して豊臣秀吉と戦い、また、岡崎城を攻略しようとした豊臣軍を長久手で破る。 |
| 天正14年(1586) | 家康と秀吉の和議成立。 家康、秀吉の異父妹である朝日姫と結婚。 秀吉実母の大政所、岡崎に下向し、家康上洛する。 家康、居城を駿府城に移す。 |
| 天正16年(1588) | 家康、京都屋敷造営のための木材調進を三河本願寺門徒に命ずる。 |
| 天正17年(1589) | 家康領国の5か国に検地が行なわれ、郷村に家康の7か条定書が出される。 |
| 天正18年(1590) | 秀吉、小田原の北条攻めを行い、家康先鋒役を命じられる。 家康、秀吉により関東に移封され、田中吉政岡崎城主となる。 |
| 文禄元年(1592) | 文禄の役。 家康、肥前名護屋に滞陣し、秀吉の本営を固める。 |
| 慶長元年(1596) | 家康、権大納言従二位から内大臣正二位に昇進。 |
| 慶長3年(1598) | 秀吉死去。 |
| 慶長4年(1599) | 家康、伏見城西の丸に入り、ついで、大阪城西の丸に移る。 |
| 慶長5年(1600) | 家康、関ヶ原で石田三成軍を破る(関ヶ原の戦い)。 |
| 慶長8年(1603) | 家康、征夷大将軍に任じられ、江戸幕府を開く。 |

| | |
|-------------|---|
| 慶長10年(1605) | 家康、將軍職を秀忠に譲る。 |
| 慶長12年(1607) | 家康、江戸城より駿府城に移る。 |
| 慶長15年(1610) | 家康、名古屋城の築城工事に着手。 |
| 慶長19年(1614) | 家康、大坂城の豊臣秀頼を攻める(大坂冬の陣)。 |
| 元和元年(1615) | 家康、大坂城を落城させ、豊臣氏を滅ぼす(大坂夏の陣)。 「武家諸法度」および「禁中並公家諸法度」公布される。 |
| 元和2年(1616) | 家康、太政大臣に任じられる。 家康、4月17日に駿府城にて死去、久能山に葬られる。 |
| 元和3年(1617) | 家康、東照大権現の神号をうけ、日光山に改葬される。 |

☆家康の本陣旗に書かれていた

(おんりえどごんぐじょうど)

「**厭離穢土欣求浄土**」について

けがれたこの世を嫌い抜け出して離
れたい 浄土に心から喜びをもとめる

- ・平安時代の僧 源信の書に書かれている
 - ・今川義元の討死の後、家康は菩提寺である大樹寺へと逃げ隠れた。
 - ・前途を悲観した家康は、松平家の墓前で自害しようとした。
- その時、住職である登誉上人の諭した言葉に、含まれていた伝わる

占部日良麿(ひらまる)

平安時代 占部開墾

- 平安時代前期の貴族
- 大同2年(807)(伊豆卜部の祖)に生まれる
- 天安2年(858)神祇権大佑に任ぜられ宮王を兼ね、貞観8年(866)三河権介を経て、貞観10年(868)従五位下になった
- 三河権介の時代、現在の占部地方は荒地の多い土地であったので、農民に開墾を説き人々の暮らしをよくした
- その事に対して、村人が感謝し、いつしかこの地域を占部と呼ぶようになった。
- 素盞鳴神社は、この「日良麿」を神として祀っている
- こののち、備後介・丹波介と地方官を歴任した。
- 元慶5年(881年)12月死去。享年75

宇都宮泰藤(1302-1352)

子孫は大久保一族 新田義貞の首 犬頭神社

- 南北朝時代の武将。乾元元年(1302)、宇都宮に生まれる
- 南朝方に属す新田義貞の家来となったが、義貞は越前の藤島で戦死。犬頭神社には、義貞の首塚があるが、信憑性については疑問とも言われている
- 泰藤は碧海荘の荘官として上和田に来住し、上和田に城を築いた。その時犬頭神社も支配下に置いた。
- 泰藤 剃髪し入道に 興国2年(1341)妙國寺(法華宗)を建て寄する
- 支配地内の犬頭神社を尊崇したので、今昔物語の犬頭糸の話の付合にして、泰藤を主人公とする犬頭説話が誕生
- 正平7年(1352)享年51歳没す。
- 石碑・・ 宮地町妙國寺の寺内の正面に泰藤の石碑がある
- 子孫 宇都一宇津一大窪一大久保忠俊等の大久保一党

小笠原長常(1818-1878)

中島陣屋第7代当主・幕末の海軍奉行

- **小笠原家(旗本3000石)は中島に陣屋があった**
元禄10年(1697)～明治に至るまで継続
①小笠原長定 ②長剛 ③長賢 ④長儀 ⑤長有 ⑥長垣 ⑦**長常** ⑧長功
- 長常は、天保14年(1843年)、家督を継ぎ従五位下長門守に叙任され中奥小姓となる。
- 嘉永6年(1853年)の甲府勤番を経て、安政3年(1856年)に浦賀奉行に就任する。
- 安政5年(1858年)に京都町奉行となって**安政の大獄に大きく貢献**。
- 万延元年(1860年)に**大目付、勘定奉行**、文久2年(1862年)に江戸北町奉行と重職を歴任し、新設された政事改革御用掛にも抜擢される。
- しかし同年後半、安政の大獄での活動を咎められて書院番頭に左遷。
- さらに間もなく免職、隠居処分となり家督を養子の長功に譲り、**軽鷗**と号す。
- 慶応元年(1865年)、再び登用されて官位を筑後守に改め神奈川奉行に復帰。慶応2年(1866年)に陸軍奉行、海軍奉行となった。江戸幕府崩壊後、徳川宗家が静岡藩に転封となるとこれに従った。明治11年(1878年)、愛知県碧海郡中島村の旧代官早川邸に滞在中に病没。
- 墓所は同所の**竜泉寺**。墓碑には**勝海舟の「軽鷗小笠原長常君墓」**の墓表があり、藤原次謙撰文、早川龍介書によるものである。